

JICA海外協力隊OV(OB・OG)向け

クロスロード

CROSSROADS

2025 | 別冊



特集:日本の地方から多文化の懸け橋に! 地域とつながる協力隊員



JICA海外協力隊発足60周年記念式典の様子
2025年11月13日 東京国際フォーラム



- ① マーシャルの特産品の展示ブースで伝統工芸品『アミモノ』を紹介した吉田さん。アミモノとはココナツの茎などを編んだ小物や装飾品で、日本統治時代に伝わった日本語に由来する
② ブースを訪れた家族連れにジンバブエの地理を説明する行田さん。「日本では過去のマイナスなイメージがまだまだあります、経済が回復しつつあってアフリカ諸国の中では治安もいい国で、とても観光しやすい地域でもあることを伝えました」
③ 日程の合間に奈良市内の観光やホームステイ、JICA関西への訪問など、日本を知る体験もしたPNGの児童たちと内山さん

盛況のうちに閉幕した大阪・関西万博 現役隊員たちも現場で貢献!

2025年4月から10月まで開催された大阪・関西万博。参加各国にゆかりのある大勢のOVが直接的・間接的にサポートを行う中、現役隊員の立場から関わった人たちもいた。

例えば、マーシャルの天然資源商業省に配属されている吉田夏喜さん（デザイン／2023年度3次隊）は、活動先が万博業務の担当部署だった。ブースのデザインや設営、万博運営側との調整などの準備段階から携わっており、同僚を伴って業務一時帰国し、ブースのガイドも務めた。

「英語での質問をためらう方も、ブースに日本人がいることで気軽に話しかけてくれて、マーシャルを知ってもらうための貢献ができたと思います。現地の特産品のデザイン改善に向けた来場者アンケートも実施したので、任地へ戻ってからはその結果を基にパッケージ改善などを進めたいです」

ジンバブエ派遣中の行田莉奈さん（マーケティング／2023年度4次隊）も、配属先であるジンバブエ観光局の同僚と共に万博に参加。ブースでは駐日ジンバブエ大使館と協力して来場者に観光情報を提供したほか、来場者のVR体験をサポートする業務も行った。

「来場の方々に現地の魅力を直接伝える中で『行ってみた

くなった』という声を多く頂き、観光促進につながる貴重なコネクションも得ました。今後は、スタディツアーの開発やメディア向けウェブサイト構築など、私の任期終了後も見据えた活動を続けていきます」

8月までパプアニューギニア（以下、PNG）のソゲリ小学校で活動していた内山翔太さん（青少年活動／2023年度1次隊）は、任期終盤となる7月、配属先の児童6人と教員を伴って「万博国際交流プログラム（※）」の一環で日本を訪れた。赴任当初から配属先と奈良市立ならやま小中学校などのオンライン交流を続けてきたほか、昨年からは万博国際交流プログラムの下、大阪市立加美北小学校とも交流を重ねており、今回の来日に結実した。10日間の滞在期間の最後には万博会場で、PNGのナショナルデーに全員で参加。児童たちは舞台上で国家を齊唱するなどした。

「PNGの子どもたちは、海外はおろか学外で学ぶ機会にさえ恵まれず、将来像をイメージするロールモデルになる人と出会う機会も乏しい。彼らが自らのキャリアを考える機会は決して多くないので、今回の来日が日々の学びへのモチベーションにつながればと願っています」

JICA海外協力隊発足60周年 青年海外協力隊事務局からのメッセージ

世界と日本を変える力 —JICA海外協力隊のこれまでとこれから—

1965年に「日本青年海外協力隊」として初代隊員がラオスの地に降り立って以来、5万8千人を超える協力隊員が情熱を原資に99か国で活動してきました。この日本を代表するボランティア事業は、青年海外協力隊、JICA海外協力隊へと名称を変更しつつ、20世紀おわりから21世紀はじめの激動の時代を駆け抜け、変化と発展を遂げながら今年で発足60周年の節目を迎えました。

JICA海外協力隊には時代の変化に左右されない価値があります。異文化の社会に飛び込み、現地の言葉を話し、人々と同じ生活をし、一緒に課題解決に取り組んで汗を流す地域コミュニティに根差した協力のあり方は、発足当時から現在まで変わらず継承されています。これまでに派遣された隊員一人ひとりの現場での愚直な活動の積み重ねにより、世界中で地域の人々と隊員の相互理解が深まり、そして強い絆が育まれました。この「人と人とのつながり」は、隊員の任国と日本の信頼関係づくりにも大きく貢献してきました。

今日の世界は、気候変動、感染症、自然災害、経済悪化、紛争などが連鎖する複合的な危機に直面しています。世界の至るところで発生した対立や分断により、とりわけ途上国の脆弱層は「人間の安全保障」に対する脅威にさらされています。この未曾有の危機に対処するには、国を超えた地域や人々のつながりに基づく対応が必要であり、このつながりを生み出す国際協力の果たす役割はますます重要だといえます。

JICA海外協力隊は、発足から一貫して「人と人とのつながり」を大切にしながら事業を展開してきました。途上国に派遣された隊員一人ひとりは、草の根レベルで任地の人々と交流し相互理解を深め、異文化の中で共生する力を身につけ、途上国の経済や社会の発展や復興に寄与してきました。現場で地域の課題に向き合い、ともに解決に向けて取り組む姿勢から、途上国において日本人に対する信頼が培われてきました。隊員からは、ボランティアとして教えるつもりが多くを教わり、任地の人々とのつながりがその後の人生に活かされている話をよく聞きます。そして各国で活動を終了した後も、多くの隊員経験者が日々の生活や仕事の中で国籍や文化によらず他者を尊重し、思いやりの気持ちと寄り添う心を持ちながら国内外の社会還元に貢献しています。世界を取り巻く様々な危機に立ち向かうためには、今まさに60年もの間、海外と日本の架け橋であり続けた協力隊事業の価値を再認識するべきではないでしょうか。

日本国内では少子高齢化や人口減少により過疎化と都市への一極集中が進行し、それに伴う新たな社会課題も生まれています。時代とともにJICA海外協力隊を取り巻く国内環境や協力隊員を志望する応募者の動機も変化しています。今後も日本のボランティア活動を代表する協力隊事業を継続し発展させるためには、対象年齢の見直し、新派遣制度の導入、パートナーとの共創、訓練の充実、環流の推進などに取り組み、事業そのものを革新する必要があります。更なる事業の発展に向け、我々事務局は伝統の継承と革新の実行に不断の努力を続けていきます。

最後に、これまで世界99か国の任地で暮らし、人々に寄り添って活動を展開し、丁寧、誠実、謙虚に「信頼のバトン」をつないできたすべての協力隊員の皆様、またJICA海外協力隊の意義を理解し、隊員を愛し支えてくれた途上国の政府や地域コミュニティの皆様、更には日本国内で協力隊事業を応援してくれた政府や国民の皆様に心から御礼申し上げます。我々事務局一同、皆様のおかげで発足60周年の節目を迎えた「人と人とのつながり」を象徴するこの事業を通して、今後ますます途上国と日本国内を元気にするべく一層精進してまいります。

青年海外協力隊事務局
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
二本松青年海外協力隊訓練所

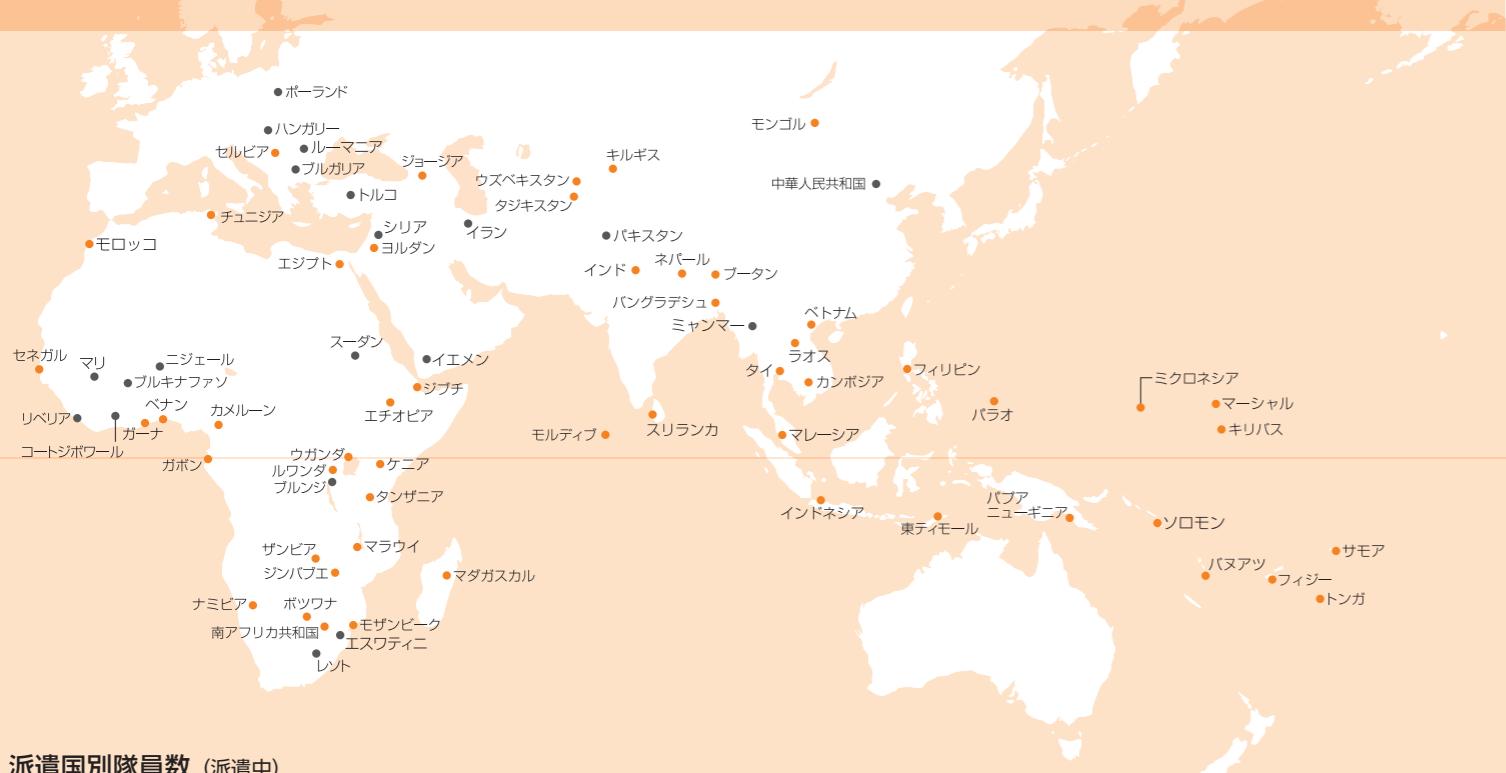
大塚卓哉第18代事務局長と事務局・訓練所スタッフ一同

JICA海外協力隊 派遣現況 (2025年10月末現在)

●は現在、隊員が活動中の国(74カ国)
●は隊員が派遣されていた国

2025年10月末現在、74の派遣国で1,635人のJICA海外協力隊員が活動しています。累計派遣人数は延べ5万8,001人に達し、昨年から1,005人増加。JICA海外協力隊が発足60周年を迎えた今年は国内外で記念イベントが催行され、長きにわたる協力隊員たちの貢献や、現地社会との間で培われてきた信頼関係の価値が改めて見直されています。

※表とグラフの数値は2025年10月末現在の延べ人数
※一般: 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア: シニア海外協力隊
日系一般: 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア: 日系社会シニア海外協力隊



派遣国別隊員数 (派遣中)

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	9	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	17	
チュニジア	8	2
モロッコ	31	
ヨルダン	18	

アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	33	
エチオピア	19	
ガーナ	36	
ガボン	9	2
カメルーン	16	
ケニア	36	1
ザンビア	38	
ジブチ	9	
ジンバブエ	15	
セネガル	33	2
タンザニア	34	
ナミビア	9	
ベナン	25	
ボツワナ	19	2
マダガスカル	35	
マラウイ	31	
南アフリカ共和国	4	
モザンビーク	14	1
ルワンダ	29	1

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,493 (549/944)	63 (48/15)	77 (27/50)	2 (0/2)	1,635 (624/1,011)
累計 (男性/女性)	49,011 (25,602/23,409)	6,745 (5,445/1,300)	1,690 (654/1,036)	555 (256/299)	58,001 (31,957/26,044)

※括弧内は男女の内訳(男性/女性)

中南米地域

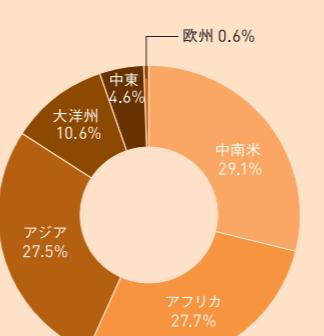
国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
インド	14			
インドネシア	32			
ウズベキスタン	15			
カンボジア	32			
キルギス	35			
ジョージア	15			
スリランカ	20			
タイ	43	1		
タジキスタン	2	4		
ネパール	23	3		
バングラデシュ	2			
東ティモール	26			
フィリピン	21			
ブータン	24			
ベトナム	36			
マレーシア	19	2		
モルディブ	5			
モンゴル	25	2		
ラオス	44	4		

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	4	
ソロモン	23	1
トンガ	18	1
バヌアツ	20	
パプアニューギニア	17	
パラオ	22	2
フィジー	11	2
マーシャル	14	1
ミクロネシア	22	1

地域別派遣人数の割合

※割合は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100となりません。



表紙の説明

記念式典第二部ではOVたちによるトークセッションや、協力隊の名を冠した小惑星「Jicakyoryokutai」に関する紹介が行われた。終盤ではOVによるファッショショーや、20組のグループが各国の衣装などを身につけて舞台を彩りながら、自らの活動紹介なども行った。最後は第二部登壇者と客席の人々が協力隊歌「若い力」を齊唱し、式典を締めくくった。

JICA海外協力隊OV(OB・OG)向け

クロスロード

CROSSROADS

2025年 OV(OB・OG)向け

CONTENTS

2 大阪・関西万博に貢献した隊員たち

3 卷頭メッセージ

4 JICA海外協力隊派遣現況

6 [特集]

日本の地方から多文化の懸け橋に!
地域とつながる協力隊員

12 Award Winners

JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰受賞者ほか

15 JOCV MEDIA

OVによる本とウェブコンテンツ

16 JICA海外協力隊起業支援プロジェクト(BLUE)

1期生の事例、2期生の声ほか

18 広げよう! OB・OGのネットワーク

OV会リスト、新規発足OV会紹介ほか

20 JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

21 OV News

24 JICA海外協力隊応援基金 事例紹介

【凡例】この号におけるJICA海外協力隊の隊員の表記は、2016年度1次隊以前の隊次は和暦を併記しています。

2016年度2次隊以降: 氏名(派遣国/職種/西暦隊次)

2016年度1次隊以前: 氏名(派遣国/職種/西暦(和暦)隊次)

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

※本誌記事内の「OV」は、「Old Volunteer」の略で、OB・OG両方を指します。

【クロスロードについて】

「クロスロード」は、JICA海外協力隊員が活動を円滑に行うための情報などを提供する現役隊員向けの通常号を年9回、帰国隊員に向けた情報を提供するOV向け別冊を年1回、これからJICA海外協力隊を目指す方に向けた情報を提供する応募者向け別冊を年2回発行しています。JICA海外協力隊ウェブサイトでも公開しています。

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

▶ウェブ版はこちら

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



地域とつながる協力隊員

特集
日本の地方から多文化の懸け橋に！

日本国内の地方の衰退に歯止めをかけるべく、地方創生が叫ばれて久しい。さらに昨今では増加する外国人との関わりも全国的な社会課題となっている。そうした中、今年閣議決定された「地方創生2.0基本構想」では協力隊経験者を地域活性化や多文化共生に資する人材として生かすことが明記されたように、日本社会でOVが果たすことのできる役割は小さくない。本特集では、すでに地域社会に飛び込んで活動しているOVや、そうした人々に刺激を受けて海外へ飛び出し、再び地域へ戻ろうとしている隊員の姿を紹介する。

Text&Photo = 飯潤一樹(本誌)、阿部純一(本誌) 写真提供 = ご協力いただいた各位



外国にルーツのある住民が多い静岡県牧之原市に地域おこし協力隊員として飛び込んだ2人のOV



食とスポーツを通じて
多文化交流の促進に
取り組む



カメルーンで小学校教育隊員として活動しながら、現地の人々が地域に根差した生き方をしていることに感銘を受けた小松さんは、帰国後は地元の愛知県豊田市足助町の地域活性化に貢献したいと考えた。同町は紅葉の名所として有名な観光地だが、近年は過疎化が進み、かつてのにぎわいが見られなくなっていたからだ。

そこで祖父母の実家を拠点とし、外国人観光客をターゲットにアフリカ布を使った着物のレンタルや、多文化交流が図れる居酒屋の経営、宿泊業などを計画。一度は試行段階まで進んだが、そうした活動には、孤独感やノウハウ不足からくる不安もつきまとった。そんな矢先にJICAからのメールで目にしたのが今回の地域おこし協力隊募集情報だった。「マキノハラボは地域密着型で、外国につながる子どもたちに向けた取り組みから宿泊業まで行っていて、自分がやりたかったことの勉強になりそうだ」と感じ、ぜひここで活動したいと思いました。

小松さんの活動テーマは、「だれでも未来食堂」の開催とフレスコボール体験会を通じた多文化交流の促進だ。

だれでも未来食堂は、過疎化や旧片浜小が廃校となった影響で薄れてしまった地域住民同士の交流を活性化させようと、コロナ禍で立ち消え状態になっていた子ども食堂の計画を復活させたもの。慣れない補助金申請から始め、調理は

資金の関係で基本的には料理が苦手な小松さんが一人で担当。さまざまな苦労はあったが、「回覧板やウェブで周知したところ、片浜地区の高齢者20人ほどに加え、外国につながる子どもとその親たちも含む地域の家族など計50人以上が参加してくれました」。4月の活動開始から10月までに計4回開催し、毎回好評だという。

「孤独になりがちなお年寄りの方々が、おしゃべりの機会にしようと知人と説き合させて来ることが嬉しいです。また、私自身も海外に住んでマイノリティになった経験から、親の仕事の関係で外国から来た子どもたちの大変さがわかりますが、食堂で楽しそうに食べている姿を見ると、良い交流のきっかけづくりができると思います」

スポーツを通じた多文化交流も、フレスコボールの実施を通じて目指している。これはブラジル発祥のビーチスポーツで、ペアになってボールを打ち合う球技だが、大きな特徴は、相手と競わないこと。ラリーを続け、その数を他のペアと競う。相手が打ち返しやすい所へボールを返すことが大事で、



「思いやりのスポーツ」ともいわれている。ビーチに近いマキノハラボの立地を生かせるアクティビティもあり、小松さんは積極的にコミュニケーションを取りながらプレーすることが多文化交流にぴったりだと導入した。

「体験会を開催したところ、外国人と日本人が同人数くらい参加してくれて、普段はなかなか接点のない人同士が交流する場になりました。今後は定期的に実施して、さらに多くの人に参加してもらい、友達同士になれる機会にしていきたいと思っています」

牧之原市には縁がなかった小松さんは、「マキノハラボで活動する中で、浅野さんの地域の方々の巻き込み方や仕事の進め方から、大いに勉強させてもらっています。今後は、外国人観光客に茶摘みや農泊体験をしてもらう事業を考えていって、すでに農家の方々と相談を始めています」。牧之原の地で、小松さんが目指す地域活性化が形になり始めているようだ。



マキノハラボから徒歩1分のビーチで開催されたフレスコボール体験会

日本語教育を通じて 子どもたちが 学校になじめるよう支援



山本綾香さん

日系／ドミニカ共和国／日本語教育／
2021年度1次隊・兵庫県出身

ドミニカ共和国で日本語教育隊員として活動した山本さんは、2023年に帰国した後も、日本語教育を通じて子どもたちを支援したいと考え、独立行政法人国際交流基金の事業で日本語教員として働いたり、公益社団法人青年海外協力協会に勤務する中で、地域おこし協力隊の募集情報を知った。「民間企業で子どもも向けに日本語教育を行っている例が、私の知る限りあまりありませんでした。マキノハラボは日本に来たばかりの外国につながりのある子どもたちが、小学校や中学校になじめるようになるために初期の日本語学習支援を行っていることに加え、さまざまな分野の事業を展開していることに魅力を感じ、応募しました」

山本さんの主な活動は、マキノハラボの日本語初期支援教



「いっぽ」に通っている子どもたち

室「いっぽ」での日本語教育、近隣の静岡県立榛原高等学校の定時制に通う生徒たちへの日本語教育、牧之原市の在住外国人の意識調査の3つだ。

牧之原市は大手自動車や部品メーカーの工場が集まっていて、中南米の日系人を中心に多くの在住外国人が働いている。そうした人々の子どもが日本の学校になじめるように、入学前に学校生活に必要な日本語や算数・数学、音楽、体育などを教えてるのが「いっぽ」で、牧之原市からの委託を受けて運営している。山本さんは、子どもたちが教員への質問待ちで並んでいる時間の有効活用や、家庭学習を補強するために、日本語暗記カードや日本語クイズアプリケーションを導入するなど、新たなアイデアを生かしている。

榛原高校の定時制クラスには外国につながる生徒が多く通っており、今年の1年生は13人中12人が外国籍で、ほとんどがブラジルから来ている。始業前に自主参加の日本語教室があり、学校から依頼を受けた山本さんが教えている。「協力隊時代は日本語学校で活動していたため、クラスの皆さん同じことを教えていましたが、いっぽや榛原高校の場合はそれぞれの学習進度が違うため、一人ひとりの理解度を見極めながら指導しています。最初は日本語をほとんど話せな



榛原高校で生徒に日本語を教える山本さん

かった子が、たくさん単語を覚えてくれたり、新しく入ってきた子に教室のルールを教えていたりといった成長を見せてくれることにやりがいを感じています」

牧之原市に移住して3ヶ月ほどがたつ。「私は交流があまり得意なほうではありませんが、この地域の在住外国人は日系ブラジル人の方が多いため、ドミニカ共和国の日系社会で活動してきた経験を踏まえて共通点を探しながら交流を図っています。また、地域おこし協力隊の活動については、現地に入り、自分で課題を探りつつ、住民の方々の考えを聞き、職員のやり方を参考にし、自分でも提案して進めていくという手法が、JICA海外協力隊での活動と一緒にだと思います」。

山本さんは、今後の活動で取り組みたい課題について、次のように話している。「私の印象では、外国につながりのある子どもたちは、親が工場で働いているから自分も将来は工場で働く、と思っているように感じています。しかし、彼らにもっと広い視野で将来を考えてほしい。そのためにも、自らのルーツやアイデンティティを見つめる機会を設け、自己理解や自己肯定感の向上につながる支援を行うと共に、継続的なサポートを通じて、地域に根差した“出口支援”的な仕組みづくりも検討していきたいです」。

代表取締役の浅野さんは 2人に新たな発想を期待

浅野さんは、今回、JICA海外協力隊経験者を地域おこし



マキノハラボの拠点となっているカタショー・ワンラボの教室にて。左から、小松さん、浅野さん家族、山本さん

協力隊員として受け入れたことについて、「地域が抱える課題に取り組む上で、新しい視点が加わったと思います。さらに多様なバックグラウンドを持つ人材がマキノハラボの活動に関わってくれることで、地域住民との交流や新規事業の推進が活発化していくことを期待しています。小松さんは、2人とも教育分野での協力隊経験を経て、異文化理解や国際協力の視点を地域活動に生かしてくれています。現場での調整力や異文化間を橋渡しする力など、まさに協力隊経験者ならではの強みが地域でも発揮されています」と話している。

名寄市におけるJICA海外協力隊グローカルプログラム（帰国後型）実施覚書締結式



名寄市の橋本副市長（左）とJICAの小林理事（右）

JICA海外協力隊 グローカルプログラム（帰国後型） 自治体とJICAの間で実施に向けた 覚書が締結

2022年より派遣前訓練の一つとして青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊合格者向けにJICA海外協力隊グローカルプログラム（派遣前型）が実施されてきたが、25年6月、北海道名寄市とJICAとの間で“帰国後型”的な実施に向けた覚書が初めて締結された。

締結の背景には、名寄市が介護分野などで特定技能などの外国人材の活用を積極的に進めている状況がある。昨今、地方でも在住外国人が増加し、地域住民と外国人の相互理解が重要になってきた。しかし、外国人との交流や支援については、地方は経験が少なく、関わることのできる人材も少ないため、市では本プログラムを通じて人材確保を進めることとした。

プログラムでは、名寄市による地域おこし協力隊の枠組みを活用した人材募集に対し、JICAがOVへの案内・広報といった形での協力などを検討している。同市が続けてきた、日本

語教育や日本語を通じた市民交流などの多文化共生支援の取り組みをサポートする。OVの帰国後の国外での経験を活かした社会還元や地域への“環流”を促すこのプログラムはJICAと日本国内の地域との新たな連携のモデルとなりうる。

6月13日に名寄市役所で行われた締結式では、加藤剛士市長とJICAの小林広幸理事が署名し、橋本正道副市長からは、JICAと連携して共生社会構築をさらに進めていきたい旨の声があった。小林理事は、23年の開発協力大綱で海外の経験や価値観を国内に環流することが謳われるようになったと話し、自身がマイナリティとしての経験を持つOVたちが地域の現場でその経験を生かすことに期待を寄せた。



群馬県高崎市からローカル線で約30分。県南西部に位置する甘楽町から富岡市にかけての“甘楽・富岡地域”は、何人のOVが移住している土地だ。各国からのJICA研修員を長らく受け入れていて、近年では協力隊合格者の「グローカルプログラム（派遣前型）」の実施地域の一つにもなるなど、昔ながらの城下町や農地の中に国際性が息づいている。そうしたグローバルとローカルの交錯する地域で、さまざまな立場の人々の人生もまた交錯し、関わり合っている。

グローカルを体現する甘楽・富岡に関する協力隊員たち



技術補完研修で過ごした甘楽・富岡に戻り、衰退する農業を支える



たかの かずま
高野一馬さん

モザンビーク／野菜栽培／
2006(平成18)年度2次隊・宮城県出身

この地域に関わる協力隊関係者が口をそろえるのは、海外との交流が活性化した原点には、2025年に他界するまで20年間町長を務めた茂原莊一さんや、OVで群馬県出身の矢島亮一さん（パナマ／村落開発普及員／1998（平成10）年度3次隊）が立ち上げたNPO法人自然塾寺子屋の存在が大きいということである。

09年に甘楽町で就農して高野農園を営む高野一馬さんは、まさに自然塾寺子屋を通じて移住したOVの第1号。現在は



現在働いているインドネシア人の青年と高野さん。「高齢化や離農が進む中、私が地域の農地を守らなければという気持ちもあり、人手を増やして規模拡大に動き始めました」

※技術補完研修…協力隊合格者のうち一部の対象者に向け、実務的な技術・技能の向上や教授法取得のためJICAが実施していた研修。現在は廃止されている。

長ネギやタマネギ、ナスを中心に町内数カ所の土地を借りて栽培しており、若手農家として町からも地域農業への貢献を嘱望されている人物だ。10月中旬に現地を訪ねると、特定技能外国人として雇用している2人のインドネシア人青年と共に、午後に予報されている雨の前にどれだけ長ネギを収穫できるか相談していた。今夏には雹や竜巻の被害もあったが、「高野農園はハウスではなく、すべて露地栽培。天気との駆け引きを面白く思って取り組んでいます。天候悪化の前に見込みどおり作業できると、勝った！と嬉しくなりますね」と屈託なく笑う。

高野さんが初めて甘楽町を訪れたのは、協力隊派遣前の技術補完研修（※）のこと。自然塾寺子屋による受け入れの下、6ヶ月間にわたって地元農家の指導を受けた。その後、赴任したモザンビークで見たのは、少雨による不作が人々の生死に直結する状況だった。

「『食べる』ということがすべての基礎になると実感させ



ナス畑の様子を見る高野さん。写真奥のビニールハウスの場所も人から借りていて、出荷する野菜の選別やパッキングを行っている

られる経験でした。任期を終えて帰国した時、後継者不足などに苦しむ日本の農業に携わりたいと考えたことから矢島さんに相談。技術補完研修で過ごした甘楽・富岡地域に愛着もあり、4年ほど自然塾寺子屋で働きながら、ここでの就農を模索しました」

元来、外国人も含めたよそ者に寛容な傾向の地域とはいって、土地を借りて就農するのはハードルが高かった。それでも、茂原町長（当時）や技術補完研修時代に関わった農家の人たちなど支えてくれる協力者もあり、それがこの地の魅力だと話す高野さん。最近では規模拡大に本腰を入れようと特定技能外国人を2人雇い、年内にもう2人受け入れる予定だ。また、長年つき合いのあるブラジル人女性とその娘にも働いてもらっている。

「協力隊経験があるおかげで、外国人と共に働くことには何の抵抗もありません。彼らの力を借りて、自分の目指す経営を実現したいと思っています。OVとしては、自分が異国で経験した生活の不安などを思い出すと在住外国人の抱えるストレスも想像しやすいので、心の支えになっていきたい。近隣でも外国人労働者が増え、マナーや習慣の面で日本人とのあつれきが生じていますが、きちんと理解が得られるまで繰り返し伝えることが重要です。少なくとも私のところで働いてくれる子たちには伝えるべきことは伝えてお互いの文化を理解し、力を合わせてやっていきたいです」

甘楽へ来たOVたちに 刺激を受け 甘楽から飛び立った隊員



さとう あい
佐藤愛さん

パラグアイ／環境教育／
2023年度3次隊・群馬県出身

「私が協力隊に参加したきっかけは、自然塾寺子屋や高野さんたちOVからの影響が大きいです」。そう話すのは、甘楽町の職員として現職参加し、パラグアイで活動中の佐藤愛さんだ。甘楽町に生まれ育ち、自身について“甘楽をほぼ出したことのなかった人間”と評する佐藤さんが、中学生時代にイタリアでホームステイしたことがある。その時に「国際関係の仕事もいいな」と感じたが、他方で教育への关心もあったことから保育の短期大学へ進み、地元の町立幼稚園・保育園で勤務してきた。

そんな佐藤さんだったが、地域の集まりで偶然、矢島さんや高野さんと知り合ったのが10数年前。地元で外国人への研修やイベントなどの面白い活動をしている人たちがいる、というのが最初の認識で、後に協力隊の経験者たちだと知る。短大の学科長（当時）がOVだったことも興味を惹いていたが、身近でOVと出会えたことが協力隊との距離をぐっと縮めた。その後は、自然塾寺子屋のイベントなどに参加する中で、自身も協力隊へ行きたいという思いを醸成させて



学校を訪ねて環境教育に取り組む佐藤さん。「日系人と非日系パラグアイ人などさまざまな文化の人たちがごちゃまぜの環境で活動することが面白いと感じています」

といった。一度は現職参加が決まったものの諸事情で見送りとなり、2022年に勤めていた町立幼稚園・保育園が民営化になった折に再挑戦。町とJICAの連携派遣協定の下、パラグアイの日系移住地であるイグアス市への赴任が決まった。

配属先である市役所の環境課では幼児教育の経験を生かして学校での環境教育に力を入れ、同僚らに教材作りのアドバイスをしたり、市のイベントで小物作りを交えたワークショップを行ったりしている。現職の甘楽町職員として、町の図書館とイグアス市役所をつないだスペイン語の読み聞かせなども実施したが、「日本と12時間の時差があり、両国の子どもたちが同時に参加するような交流活動は難しいです」と苦笑する。今後は相互の学校でのビデオレターのやり取りなど、時差の影響が少ない取り組みを計画している。

赴任前に茂原町長（当時）からかけられた“子どもに夢を、大人に元気を”という言葉を胸に、自分が挑戦する背中を見せたいと話す佐藤さん。年明けの2月に任期を終え、甘楽町に復職する。

「身一つでパラグアイの社会に飛び込んだことで、相手の文化に興味を持つことや一緒に時間を共有することなど、異文化の人々との関わり方について多くを学びました。甘楽・富岡地域で働く外国人が増える中、地元の友人・知人からも職場の外国人への接し方を相談されることがよくあるので、帰国後は協力隊経験を生かして、少しでも地元社会のためのサポートをできればと思います」



イグアス市にある「Michi no eki」。甘楽町の道の駅を参考にしたもので、パラグアイから同町への視察も行われている

Award Winners

～受賞者～

「第3回 JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」をはじめ、
2024～25年に表彰を受けた協力隊OVを一部ご紹介します。

Text = 新海美保 写真提供 = ご協力いただいた各位

第3回 JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰

JICA海外協力隊経験者で国内外・公私を問わず社会課題の解決に取り組んでいる人を表彰する主旨で、2023年に開始されました。

大賞・多文化共生賞

青木由香さん

日系／ブラジル／日系日本語学校教師／2005(平成17)年度0次隊・富山県出身
NPO法人アレッセ高岡 代表

協力隊としてブラジルの日系コミュニティで活動中、出稼ぎで日本へ渡った親子が抱える課題を知り、帰国後に地元・富山県高岡市の学校で外国人相談員として勤務。外国にルーツを持つ子どもたちへの支援を開始し、多言語資料の作成や高校進学説明会など情報発信にも力を入れてきた。地域の人と課題を共有し、共に考える講座やイベントの開催、知事への提言書提出、JICA北陸との連携などにも取り組み、周囲を巻き込みながらの多文化共生社会の実現に貢献している。

〈受賞理由〉

日本語での学習が難しい子どもたちへの支援を行い、多文化共生社会の実現に貢献した。



受賞コメント

協力隊としての日々が、今の私の活動をダイレクトに方向づけ、そして支えてくれています。今回の受賞によって、この歩みを続ける勇気と新たな決意を頂きました。これまで関わったすべての子どもたちや関係者の皆さんに感謝の気持ちを伝えたいです。

アントレプレナーシップ賞

星野達郎さん

グアテマラ／小学校教育／
2013(平成25)年度3次隊・
神奈川県出身
株式会社 NIJIN 代表取締役



地域活性化賞

庄田清人さん

マラウイ／コミュニティ開発／
2014(平成26)年度2次隊・
福岡県出身
公益財団法人
ちくご川コミュニティ財団 副理事長



マラウイ北部の村で乳幼児の栄養改善などに取り組み、帰国後、起業を経て、2020年からちくご川コミュニティ財団に入職。「子ども若者応援助成」などの独自プログラムや休眠預金活用事業の統括を担い、協力隊派遣中の経験を生かし、周囲と連携して地域の社会課題解決を目指す包括的なプログラムの企画・運営を行っている。

〈受賞理由〉

企業や自治体などと協力して社会全体を学びの場にする“教育共創モデル”を確立。多様な教育の在り方を示し、子どもの自己肯定感を育む取り組みが評価された。

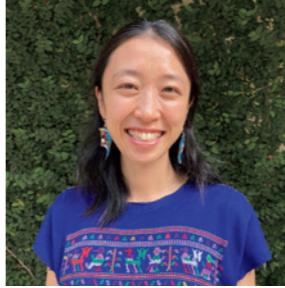
受賞コメント

協力隊での挑戦が原点です。現場で学んだ「行動する力」を、これからも大切にしていきます。

開発協力実践賞

近藤咲さん

グアテマラ／小学校教育／
2016(平成28)年度1次隊・愛知県出身
NPO法人幸縁 代表理事



グアテマラの子どもたちに中学3年間の学費を支援する奨学金事業や、オンラインの英語学習プログラムを実施。基礎学力の向上とリーダーシップ育成を目指す現地学習塾も開校し、教員としての知見や協力隊の経験を生かしつつ地域に根差した学びの場を提供している。学業継続をサポートする里親制度などもを行い、グアテマラの子どもの教育向上を通して、互いに分け合い支え合ってそれぞれの人生が豊かになる関係づくりを「幸縁」と呼んで、活動に取り組んでいる。

〈受賞理由〉

貧困などで進学が難しいグアテマラの子どもたちに向けて、奨学金事業や学業継続をサポートする里親制度や、日本の子どもたちとの交流事業などを展開し、多様な人が共に成長し合える場を生み出した。

受賞コメント

ここまでグアテマラの子どもたちのために幸縁を広め、深めてくださった皆さんにこの賞をお送りしたいです。

審査員特別賞（災害支援）

山路健造さん

フィリピン／コミュニティ開発／
2014(平成26)年度2次隊・大分県出身
一般社団法人
多文化人材活躍支援センター
代表理事



フィリピンから帰国後、佐賀県の認定NPO法人地球市民の会の一員として、在留外国人の支援や災害時の多言語情報発信などに尽力。官民連携のウクライナ避難民支援プロジェクトの事務局を務めたほか、多文化人材活躍支援センターを立ち上げ、2024年の能登半島地震・奥能登豪雨では被災した石川県輪島市へ。輪島市に移住し、支援の輪から取り残された外国人のサポートや日本人との交流イベントなどを企画すると共に、外国人たちも安心して生活して日本人住民と支え合える環境の整備を進めている。

〈受賞理由〉

能登半島地震・奥能登豪雨で被災した外国人住民の居場所づくりに取り組み、支援する・される側を超えて相互に助け合える場をつくり上げた。

受賞コメント

OVは誰もが現地で「外国人」を経験し、文化の違いや心細さを経験したはずです。日本に住む外国人も住みやすい社会を共につくりましょう。

第4回の募集開始はHPでお知らせします



審査員特別賞（共生社会）

安田一貴さん

ウズベキスタン／青少年活動／
2011(平成23)年度1次隊・
福島県出身
笑顔の向こうに繋がる未来
プロジェクト
PLAY&PHOTO Studio 共同代表



ウズベキスタンの血液学小児病院で活動中に、患者や家族にとって写真を撮ってもらう体験が重要な意味を持つと知り、帰国後は理学療法士として働く傍らで、写真家に師事。カメラマンとして重い病気や障がいがある子どもとその家族のもとへ出張し、特性やニーズに寄り添った写真撮影を提供する活動を始めた。協力隊の経験や理学療法士の知見を基に、医療的ケアやリスク管理に配慮しつつ遊びの要素を取り入れた撮影プログラムを展開している。美容師や服飾デザイナーと協力してバリアフリー仕様の衣装も手がける。

〈受賞理由〉

病気や障がいのある子どものものとへ出張撮影し“心に残る撮影体験”を創出、その子らしさや家族らしさを感じられる特別な瞬間を届け続けていることが評価された。

受賞コメント

協力隊での出会いが原点です。これからも写真の力を信じて、たくさんの子どもたちへ心に残る体験を届け続けます。

審査員特別賞（スポーツと開発）

糸井紀さん

エクアドル／水泳／
2013(平成25)年度1次隊・
岐阜県出身
国際審判員(水泳)／
岐阜県水泳連盟 副理事長



協力隊時代、エクアドルの水泳ナショナルチームをワールドカップ出場に導く一方、途上国で行われた国際大会で審判員の技術に課題を感じ、帰国後に国際審判員の資格を取得し途上国の審判員の育成にも関わるようになる。教員として働きながら、パラリンピックの東京2020大会やパリ2024大会で水泳の審判員を務める。岐阜県水泳連盟の副理事長として、日本で開催される国際大会の運営サポートや選手団のケアにも力を尽くしている。

〈受賞理由〉

パラリンピックなどの水泳国際審判員として、多文化共生社会づくりに取り組み、国を超えたスポーツ界の発展に寄与した。

受賞コメント

パラリンピックでは戦争や難民問題に直面した選手たちを目の当たりにしました。彼らが笑顔でスポーツができる日まで私は支え続けます。

その他の表彰

社会還元表彰以外にも、各界で活躍する協力隊OVの方々が、さまざまな場で表彰を受けています。

2024年度国際交流基金 地球市民賞※受賞

※全国各地で国際文化交流活動を通じて、日本と海外の市民同士の結びつきや連携を深め、互いの知恵やアイデア、情報を交換し、共に考える団体に贈られる賞

くろいわはるじ
黒岩春地さん

セントルシア／コミュニティ開発／
2016年度2次隊・佐賀県出身
佐賀県国際交流協会 理事長



佐賀県国際交流協会は1990年の設立以来、長年にわたり県の国際交流を促進してきた。近年はこの見識を生かしつつ、県内外人住民の増加を背景に多文化共生を中心とする活動にシフトし、高い専門知識や倫理意識が求められる医療通訳や災害時の多言語支援でも高い成果を上げている。2019年には「さが多文化共生センター」を開設して、外国人・日本人双方の相談対応を行うなど、佐賀県における多文化共生推進に欠かせない存在である。

〈受賞理由〉

黒岩さんが理事長の佐賀県国際交流協会は、「心の国境をなくそう！」をスローガンに地域社会と連携し、外国人の急増に対応しながら共生社会を推進する姿勢が、他地域の団体の模範となる取り組みと評価された。

受賞コメント

外国人も日本人もない、人を人として信じ、仲間として助け合っていく、そんな佐賀県を目指していくたいと思っています。

第1回 JICA国際協力賞※1受賞／ JaGAAIS Life-Time Awards※2受賞

※1: JICAの協力を通じて開発途上国の社会と経済の発展に貢献し、著しい功績を収めた個人・団体に対する賞
※2: 斯リランカ日本留学生同窓会(JaGAAIS)主催のスリランカの経済と社会への多大な貢献に対し贈られる賞

ばばしげこ
馬場繁子さん

スリランカ／幼稚園教諭／
1986(昭和61)年度3次隊・東京都出身
スランガニ代表



協力隊員として保育施設で活動し、1992年にNGO団体スランガニを設立。以来、貧しい家庭の子どもたちの学びの環境向上支援や幼稚園教諭への研修、絵本25冊を収めた「絵本箱」寄贈などを続けてきた。協力隊での経験とネットワークを生かし、日本とスリランカの人々や組織と連携しながら活動を広げている。近年は、障がい児通所センターの運営に加え、職業訓練施設も設け、子どもたちが安心して成長できる環境と、保護者の交流・支援の場づくりに力を注いでいる。

〈受賞理由〉

貧困や障害などの問題を抱えるスリランカの子どもたちが社会とつながり自立できるよう、30年以上にわたり支援してきたことが評価された。

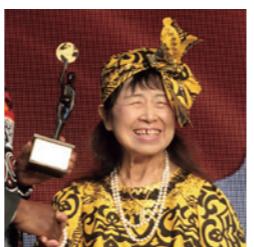
受賞コメント

子どもたちや地域の笑顔を大切にしながら、日々の活動に心を込めて取り組んでまいります。

大阪・関西万博「スワヒリ語デー記念式典」 でタンザニアより表彰

宇野みどりさん

タンザニア／婦人子供服／
1966(昭和41)年度2次隊・埼玉県出身
ワスワヒリの会
青年海外協力隊タンザニアOB会



2025年7月に開催された大阪・関西万博の「スワヒリ語デー記念式典」で、日本でのスワヒリ語普及に貢献があった団体・個人に対してタンザニア政府の国家スワヒリ語評議会が表彰を行い、ワスワヒリの会と同会メンバーでタンザニアの初代隊員でもある宇野みどりさんに表彰状とトロフィーが授与された。宇野さんは大学やJICA、外務省、DILAなどでスワヒリ語を教え、NHK国際放送でスワヒリ語の翻訳とアナウンスに長年従事、法廷通訳も行う。スワヒリ語弁論大会の審査員も務め、スワヒリ語の文法書や辞書、書籍3冊、絵本も出版。

〈受賞理由〉

日本におけるスワヒリ語の普及、促進、発展への多大な貢献を認められた。

受賞コメント

タンザニア滞在中スワヒリ語を習得、帰国後法廷通訳や来日大統領、政府高官の通訳をするなど、国際交流に貢献でき、嬉しいです。

ADNJアワード※受賞

※アフリカ・ディアスボラ・ネットワーク・ジャパン(ADNJ)主催のアフリカと日本の関係に重要な役割を果たしている人に贈られる賞

岸 卓巨さん

ケニア／青少年活動／
2011(平成23)年度2次隊・東京都出身
一般社団法人A-GOAL代表
一般社団法人アフリカクエスト理事
公益財団法人
日本アンチ・ドーピング機構職員



日本とアフリカをスポーツでつなぐことをテーマに、チャリティイベントなど多くの人が参加しやすい仕組みをつくり、支援・交流事業を行う。コロナ禍、失業者が増加した2020年にアフリカ5カ国のサッカーチームなどと連携して1万人以上に食料や衛生用品などの緊急支援物資を配布したことをきっかけに、A-GOALの活動を開始。現在は日本で団体職員として働く傍ら、アフリカ各国の人々と連携しケニアの巨大スラム、キベラスラムで2,000人の子どもが参加するユースサッカーリーグの運営・炊き出しや、マラウイでの農業・食堂運営のサポートを行う。

〈受賞理由〉

日本とアフリカの間で、異文化間の強固なつながりの構築に貢献してきたことが評価された。

受賞コメント

活動を支えてくださっている多くの方と共に受賞したと考えています。これからも、スポーツの力を持续可能な社会づくりに生かしていきます。

JOCV MEDIA

BOOKS

国際的に活躍する女性たちの キャリアを紹介 OVの進路を考える一冊

教育部門で国際的に活躍する女性たち11人の寄稿から成る本書。章ごとに1人が自らの経験を紹介する形式で、幼少期・学生時代に国際協力の世界への関心を持った経緯、キャリアパスにおける紆余曲折、現職のやりがい、後進へのアドバイスなど、多岐にわたるトピックが語られている。タイトルに“女性たち”と銘打つだけにキャリアの中での妊娠・出産について言及される章もあるほか、協力隊OVによる章では、任期終了後の進路決定や協力隊経験を通じて得た事柄などにも触れられており、国際分野を目指すOVには参考になる一冊だ。



世界で花開く 日本の女性たち 国際機関で教育開発に携わるキャリア形成

編著者: 小川啓一、水野谷 優
発行: 株式会社 東信堂
定価: 2,530円(本体2,300円+税)



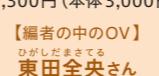
国境を超えた 社会福祉実践に ついて論じる学術書 グローバル化の中の 課題にも触れる一冊

大きく2つの部に分かれる本書は、第1部では西洋中心に構築されてきた従来の“国際ソーシャルワーク”とは異なる新たな定義・概念を模索し、特にソーシャルワークの専門家向けとなる。第2部はより広く、国境・国家の歴史や概念、国籍をめぐる社会課題、非西洋の実践事例としての仏教ベースのソーシャルワークなど、国際ソーシャルワークを考える基礎となる知見が紹介されており、グローバル化の中での“人”的福祉を多角的に考える上で示唆に富んだ一冊だ。



国際ソーシャルワーク —新たな概念構築

編者: 東田全央、秋元樹、松尾加奈
出版: 株式会社 旬報社
定価: 3,300円(本体3,000円+税)



国際ソーシャルワーク —新たな概念構築

編者: 東田全央

（スリランカ／ソーシャルワーカー／
2012(平成24)年度3次隊・兵庫県出身）

国内でソーシャルワーカーなどの経験を積み、協力隊に参加。帰国後は研究者としてJICA研究所や青森県立保健大学、アジア国際社会福祉研究所などで勤め、JICA長期専門家も経験。現在、島根大学学術研究院人間科学系准教授。

「国際協力」のディストピア」という副題を掲げた本書では、著者が隊員時代の体験や研究者としての現地調査を踏まえ、「先進国」から「途上国」への支援という開発援助の枠組み自体に対して問題を指摘している。国家間におけるさまざまな側面での格差が現地社会に影響を及ぼし、人々による国際詐欺や陰謀論、反欧米主義などの現代的な課題の拡大へつながっている様子は、国際協力に直接携わっている人でなくとも一読の価値がある。

各界で活躍するOVたちが、さまざまな手段で発信を行っています。
2024年から25年にかけて出版された3冊の書籍と、2つのウェブコンテンツを紹介します。

Text = 飯剣一樹(本誌)

協力隊経験者による書籍

【編著者の中のOV】

みずの や する
水野谷 優さん
(バヌアツ／青少年活動／
1997(平成9)年度2次隊・福島県出身)

協力隊経験後、米コロンビア大学大学院への進学や、国際労働機関(ILO)、国際連合児童基金(ユニセフ)などの国連機関での勤務を経験。2023年より国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)国際教育計画研究所にて技術協力部長を務める。

【執筆協力者の中のOV】
おかもと さ き
岡本紗貴さん
(バヌアツ／コミュニティ開発／
2018年度2次隊・広島県出身)

コロナ禍での一斉帰国後、開発コンサルティング会社やJICAガーナ事務所を経て23年よりユニセフマダガスカル事務所で教育専門官として勤務。

お ば る
小原ベルファリゆりさん
(セネガル／青少年活動／
1997(平成9)年度2次隊・埼玉県出身)

フィリピンのNGOでのインターンや協力隊を経験後、開発コンサルティング会社や世界銀行、ユニセフなどの勤務を経て14年より経済協力開発機構(OECD)へ。現在、就学前・学校教育課長を務める。



西アフリカ研究に 取り組むOVが 開発援助の現場で見た 課題

「国際協力」のディストピア」という副題を掲げた本書では、著者が隊員時代の体験や研究者としての現地調査を踏まえ、「先進国」から「途上国」への支援という開発援助の枠組み自体に対して問題を指摘している。国家間におけるさまざまな側面での格差が現地社会に影響を及ぼし、人々による国際詐欺や陰謀論、反欧米主義などの現代的な課題の拡大へつながっている様子は、国際協力に直接携わっている人でなくとも一読の価値がある。

著者: 友松夕香
発行: 株式会社 岩波書店
定価: 1,034円(本体940円+税)

ともまつゆ か
友松夕香さん
(ブルキナファソ／村落開発普及員／
2002(平成14)年度3次隊・大分県出身)

2006年に東京大学大学院博士課程に進学し、07年は国際アグロフォレストリー研究センター(ナロビ本部)で訪問研究。15年に博士号(農学)取得。プリンストン大学のボスドク研究員、愛知大学准教授などを経て、23年より法政大学経済学部准教授、24年より同教授。

協力隊経験者によるウェブコンテンツ

途上国の今を伝える ウェブメディア 語学を通じた途上国支援も



ベトナム隊員がTikTokで インフルエンサーに 帰國後も両国をつなぐ

石川テレビ放送から現職参加し、日本語番組の認知度アップを目指した山本岳人さん。自らが街を散策するTikTok動画を配信し、数十万人のフォロワーを得る。復職した石川テレビでは、日本の自治体・企業からベトナムへの情報発信をサポートする事業「ベトナムドウガ」を立ち上げるなど、映像を通じて両国をつないでいる。

大学卒業後、石川テレビで報道記者として勤務。2018年に『南京の日本人』でFNSドキュメンタリーオンエア優秀賞受賞。21年から同局を休職して協力隊に参加。ベトナムテレビ(VTV4)の日本語情報番組の制作をサポートした。23年9月の任期満了後、復職。

山本さんの
TikTok
チャンネル▶

9anas
ながもととたけひと
長光大慈さん
(ベネズエラ／環境教育／
2005(平成17)年度3次隊・広島県出身)

アジア圏で日本語メディアを運営するNNAでの勤務や記者業、フリーライター業などを経て協力隊に参加。帰国後、東日本大震災を機に立ち上げたメディアを発展させる形で、2012年にNPO法人開発メディアを設立。同法人の代表と9anasの編集長を務める。

2025年OV(OG・OB)向け プロスロード 15

JICA海外協力隊起業支援プロジェクト(BLUE)2期が始動! 協力隊で培った経験を社会課題解決のためのビジネスに



JICA BLUE Academy 1期生の活動

ザンビアで農家の収入向上を目指した挑戦 現地に渡航しブルーベリー事業立ち上げへ

Text=池田純子 写真提供=平野耕志さん



ひらの こうじ
平野耕志さん

ザンビア／村落開発普及員／
2011(平成23)年度4次隊・静岡県出身

静岡県掛川市にある観光農園キウイフルーツカントリーJapanの代表。東京農業大学短期大学部卒業後、派米農業研修生としてアメリカで学び、2012年に協力隊参加。帰国後は大学院で農業マーケティングを学び、農家や行政、大学、企業を巻き込んだ農業を行っている。JICA BLUE Academyに1期生として参加。



ザンビアの農家と農業省の方とブルーベリーを定植した平野さん。「11の農家の方に全部で33本を栽培してもらっています。予定していた苗木用の容器が手に入らなかったため、肥料用袋で代用しました」

平野耕志さんが協力隊員としてザンビアに赴任したのは2012年。首都ルサカ市の低所得層が密集居住している地区で、農業を通じた収入向上や栄養指導に携わった。

「ところが農業ではどうしても収入が上げられず、現金収入獲得のために、農地の一部で駐車場経営を試すなどしましたが、複雑な気持ちでした。また当時、現地の医師から、『良い農家が良い食糧(栄養価の高い食糧)を作らないと、豊かな国にならない』と聞き、その言葉も胸に残っていました」

帰国後は、父が興したキウイ農園を継ぎながら、認定NPO法人の事業で国内外の農業技術普及にも携わってきた。農業を通じた地域活性化を模索しながら10年ほどがたち、日本の農家として積極的なアクションを起こしていきたいと考えていたところにJICA BLUEの募集情報をOV会からのメールで知り応募、3ヶ月間の社会起業家育成伴走プログラム(JICA BLUE Academy)に参加した。

「当初は日本の農家の収入を増やして活性化させたい、そのためには光熱費を削減できるソーラー事業を始めようと思い描いていました。ですがメンターから、『あなたが本当に助けたい人は誰?』と言われて、何も返せませんでした」

メンターと議論を重ねた平野さんが改めて気づいたのは、高い技術を持ってビジネスや社会課題に挑む“格好良く社会的に意義のある農家”的姿を示したいという理想である。そして、その第一歩

ルドとして思い至ったのはザンビアだった。
「かつて協力隊で取り組んだザンビアの農業への思いが残っていましたし、ザンビアで新たな農家像を示して発信していくことが、いずれ日本の農家の活性化にもつながるのではないかと考えました」

平野さんは結果、ブルーベリー事業を通じた農家の収入向上プランを練り上げた。ブルーベリーを選んだのは、一度実をつけるまで育てれば10年以上、収入基盤が得られること、現在の農地を削らなくても育苗用容器での栽培が可能といったメリットがあるからだ。

BLUEの最終報告会を終えた後は、一般社団法人協力隊を育てる会の帰国隊員支援プロジェクトで資金面のサポートを受け、25年2月にザンビアに渡航し、事業の一歩を踏み出した。
「最初の壁は日本から苗木を持ち込むことでした。前例がないことや、より栄養価が高く、ザンビアの環境に適した品種が現地で手に入ることを知り、そちらに変更しました。また、実証実験に賛同してくれる農家の選定は、協力隊員時代に出会った農業省の知人たちが手伝ってくれて、ありがとうございました」

平野さんは事業を「2回目の協力隊」のようなものだという。
「BLUEのおかげで、またチャンスがもらえました。JICAのサポートがある協力隊とは違い、今回はすべて自分の責任でやることになりますが、半面、自由にできる良さもあります。まずは成功事例をつくり、それを広げていくことが目標です」

JICA海外協力隊LinkedIn公式アカウント

青年海外協力隊事務局は、派遣中隊員とOVのネットワーキングや活動支援を目的に、ビジネス特化型SNS「LinkedIn(リンクトイン)」を活用しています。JICA公式の非公開グループとして下記の3つがあります。

グループ紹介①

BLUEオンラインコミュニティ

社会起業・兼業を志す、もしくは実践している方を中心としたグループ。活動紹介や情報交換、JICA関係者や社会起業を支援する団体などからの情報提供、社会起業・兼業に関するマッチング機会を提供しています。

<https://www.linkedin.com/groups/14054083/>



グループ紹介②

帰国後の社会還元における情報共有グループ

社会還元活動に関心を持っている方、在住外国人支援や地域ボランティア活動に参加している方など、帰国後の活動情報を共有し、相互に知識を深めていくことで災害発生時にスムーズに活動できるグループを目指しています。

<https://www.linkedin.com/groups/14138230/>

【公式】JICA海外協力隊アカウント
非公開グループへの参加はこちらから
隊員情報の登録を!

<https://www.linkedin.com/company/jicajocv/>



グループ紹介③

災害ボランティアグループ

災害ボランティアに関心を持っている方、災害支援の現場で活躍している方などの情報を共有し、相互に知識を深めていくことで災害発生時にスムーズに活動できるグループを目指しています。

<https://www.linkedin.com/groups/14109850/>



JICA BLUE Academy 2期生の声

2025年8月キックオフ 11月最終プラン発表!

食を通じて現地の素晴らしさを発信し
ネパール文化や人々のファンを増やしたい



えのもと み き
榎本未希さん
ネパール／経営管理／
2022年度4次隊・埼玉県出身

私が派遣されたネパールの農村にはカースト制度の名残によって不利益を被っている人々もいて、そうした方が自身の文化を卑下する姿に何度も直面しました。協力隊員時代にはそういった理由から涙する彼らのために何もできず無力だった悔しさが、JICA BLUE Academyに参加した原動力になっています。

彼らに、自分たちの文化に自信を持ってもらうためには、彼らが長年積み上げてきた伝統文化について発信し、国境を越えたファンを増やすことが必要だと考えました。その第一歩として、日本に住む方々に、ネパールの乾燥発酵野菜の「グンドウルック」と、菜食主義の方々が肉の代わりにタンパク源としている大豆ミートに似た食品「マショウラ」を商品化する事業プランを考えています。

事業の実現によって、現地の方々の力となり、任地でお世話をになった方々への恩返しができればと願っています。

アフリカ布の子ども服ブランドを立ち上げ
障害がある方々が活躍できる雇用の場に



こばやし ゆか
小林結花さん
ベナン／コミュニティ開発／
2016年度4次隊・埼玉県出身

アフリカ布の魅力を新しい形で表現したいという思いから、ベナンなどから直輸入した布を使用したロリータファッションを制作販売してきました。今後は社会課題の解決とビジネスを両立させながら事業を成長させていきたい、と考えたのが、JICA BLUE Academyに参加したきっかけです。

派遣国のベナンでは障害者や孤児の支援に取り組み、日本でも障害者と交流があることから、「いつか、そうした方々が活躍できる場をつくりたい」と考えていました。そして、JICA BLUE Academyで、アフリカ布を使った子ども服ブランドを立ち上げて障害者雇用を進めていくという事業プランに至りました。

自分の中にあった“やりたいこと”がBLUEへの参加で明確にでき、面談や分析を経て具体的な目標が見えてきたので、障害者の方々や小さな子どもを持つ親をサポートできるように事業を実現させたいと思っています。

JICA BLUE 2024年度の主な実績

JICA
スタートアップハブ東京
への訪問者数

820人



地方イベント(福岡、名古屋、大阪)への参加者数: 159人、相談者を他関係機関・団体・個人へ紹介した数: 44件

起業支援セミナー

21回

参加者 1,309人



起業相談
83件
うちアドバイザーフィードバック 24件



JICA BLUE 2025年度の代表的なプログラム

JICA BLUE CARAVAN

社会で活躍するOVの取り組みの認知度向上と、地域で活躍したいOVと自治体・企業・インキュベーション施設などの接点創出を目的としたイベント。

オンラインセミナー

OVや派遣中または派遣予定の隊員を対象とした起業に関するオンラインセミナーや、OV起業家のトークイベントなど。

JICA BLUE Academy (社会起業家育成伴走プログラム)

ソーシャルビジネスの基本から、事業づくり・実装までを体系的に学ぶ3ヵ月間の実践型プログラム。

起業相談・アドバイザーフィードバック

起業を検討しているOVへのオンライン起業相談窓口。相談内容に応じ専門分野のアドバイザーとの面談を実施。

JICA BLUE Community (LinkedIn非公開グループ、メールマガジン)

ビジネスSNSのLinkedInやメールマガジンを活用し、起業支援情報の発信やセミナーのアーカイブ動画リンクなどを掲載。

広げよう!OB・OGのネットワーク

協力隊経験者で構成されるOV会、
OVが立ち上げた企業・団体などの情報をご紹介。

OV(OB・OG)会のホームページや
連絡先など、詳しい情報は
下記のリンクからご覧ください。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/info/alumni/index.html>



JICA海外協力隊OV会リスト

派遣国別

派遣国が同じJICA海外協力隊経験者などで構成されるOV会

地域	派遣国	団体名
中南米	エルサルバドル	エルサルバドル会
	エクアドル	エクアドルOV会
	ドミニカ共和国	ドミニカ共和国OV会
	パナマ	青年海外協力隊パナマOV会
	ジャマイカ	日本ジャマイカ友好協会
	ボリビア	JICAボリビアOV会
中東	ホンジュラス	ホンジュラスOV会
	イエメンほか	JOCV イエメン+UNV(国連)ネットワーク
	シリア	シリアOV会
アフリカ	ヨルダン	ヨルダンネットワーク
	ウガンダ	ウガンダ隊OV会
	エチオピア	青年海外協力隊エチオピアOB・OG会
	ケニア	協力隊ケニアOB・OG会
	タンザニア	ワスワヒリの会
	ニジェール	ニジェール有志の会
	マダガスカル	青年海外協力隊マダガスカルOV会
	マラウイ	日本マラウイ協会
	ザンビア	青年海外協力隊ZAMBIA OB会
大洋州	ルワンダ	青年海外協力隊ルワンダOV会
	サモア	青年海外協力隊サモアOB会
欧州	トンガ	JICA海外協力隊トンガOV会
	ブルガリア	ハイデペブルガリア
ルーマニア	ルーマニアOB会	
	中国	青年海外協力隊中国同志会
アジア	スリランカ	スリランカ同窓ネットワーク
	ネパール	協力隊ネパール会
	バングラデシュ	バングラデシュOVの会
	東ティモール	JICA海外協力隊東ティモールOB・OG会
	フィリピン	協力隊フィリピンOB・OG会
	ベトナム	ベトナムOV会
	マレーシア	青年海外協力隊マレーシア会
	ラオス	青年海外協力隊ラオスOV会

分野別など

職種・活動領域などが同じJICA海外協力隊経験者などで構成されるOV会

分野(大)	分野(小)	団体名
教育	環境教育	青年海外協力隊環境教育OV会
	学校教育	全国OV教員・教育研究会
	学校教育	関東教育支援ネットワーク
	学校教育	京都府OV教員研究会
	学校教育	大阪教育ネットワーク
	学校教育	兵庫OV教員研究会
	幼児教育	JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク
	日本語教育	NPO海外日本語ネット
スポーツ	開発教育	開発教育を考える会
	バレーボール	JOCVバレーボール会
保健・医療	看護師	JOCV看護職ネットワーク
	栄養士	JOCV栄養士ネットワーク
	リハビリテーション	JOCVリハビリテーションネットワーク
	ソーシャルワーカー等	JOCVソーシャルワーカー・プラットフォーム
その他	無線	JOCV-NETアマチュア無線クラブ
	地域づくり等	日本も元気にする青年海外協力隊OB会
	国際交流・協力	NPO法人 都市計画・建築関連OVの会
環境	環境	PUKUの会

シニア

JICA海外協力隊や日系社会JICA海外協力隊の経験者などで構成されるOV会

分野	団体名
総合	NPO法人シニアボランティア経験を活かす会
在住地等別	札幌SVくらぶ
	千葉県JICAシニアボランティアの会
	静岡県JICAシニア海外ボランティア協会(SOVA)
	JICA中部コスモスクラブ(東海地区シニアボランティアOV会)
分野別	JICA近畿シニアボランティアOV会
	JICA兵庫シニアOV会
	ICT海外ボランティア会

在住地等別

同じ都道府県等の在住者や出身者などで構成されるOV会

地域	県名等	団体名
北海道・東北	北海道	青年海外協力隊北海道OB会
	北海道	青年海外協力隊北海道東OB会
	北海道	青年海外協力隊道南OB会
	北海道	青年海外協力隊北海道後志OB会
	青森県	青森県青年海外協力協会(AOCA)
	岩手県	岩手県青年海外協力協会
関東・甲信越	宮城県	宮城青年海外協力協会
	秋田県	青年海外協力隊秋田県OB会
	山形県	特定非営利活動法人 山形県青年海外協力協会
	福島県	ふくしま青年海外協力隊の会
	茨城県	青年海外協力隊茨城県OB会
	栃木県	栃木県青年海外協力隊OB会
関東・甲信越	群馬県	青年海外協力隊群馬県OB会
	埼玉県	青年海外協力隊埼玉県OB会
	千葉県	青年海外協力隊千葉OB会
	東京都	青年海外協力隊東京OB会
	新潟県	新潟県青年海外協力協会
	神奈川県	青年海外協力隊神奈川県OB会(KOCV)
東海・北陸	川崎市	かわさきJICAボランティアの会
	山梨県	山梨青年海外協力隊協会
	長野県	青年海外協力隊長野県OB会
	富山県	青年海外協力隊富山県OB会
	石川県	石川県青年海外協力隊OB会
	福井県	JICA海外協力隊福井県OB会
近畿	静岡県	青年海外協力隊静岡県OB会
	岐阜県	JICAボランティア岐阜県OB会
	愛知県	青年海外協力隊愛知県OB会
	三重県	青年海外協力隊三重県OB会
	滋賀県	滋賀県青年海外協力協会(SOCA)
	京都府	NPO法人京都海外協力協会(KOCA)
中国・四国	大阪府	青年海外協力隊大阪府OB・OG会(ICOPAO)
	兵庫県	青年海外協力隊兵庫県OB会
	奈良県	奈良県青年海外協力協会(JOCA-Nara)
	和歌山県	和歌山青年海外協力協会
	鳥取県	青年海外協力隊鳥取県OB会
	島根県	島根県青年海外協力協会
九州・沖縄	岡山県	青年海外協力隊岡山県OB会
	広島県	青年海外協力隊広島県OB会
	山口県	青年海外協力隊山口県OB会
	徳島県	徳島県青年海外協力協会
	香川県	香川県青年海外協力協会
	愛媛県	愛媛県青年海外協力協会(EOCA)
九州・沖縄	高知県	高知県青年海外協力隊OB会
	福岡県	福岡県青年海外協力協会
	佐賀県	佐賀県海外協力協会
	長崎県	長崎県青年海外協力協会
	熊本県	熊本県海外協力協会
	大分県	大分県青年海外協力協会
その他	宮崎県	宮崎県海外協力協会
	鹿児島県	青年海外協力隊鹿児島県OB会
その他	沖縄県	沖縄県青年海外協力協会

その他

出身校等	団体名
酪農学園(大学・短期大学)	酪農学園青年海外協力隊OB会
親子でJICA海外協力隊に参加	NPO法人青年海外協力隊の2世代参加を促進する会

[OV(OB・OG)会の皆様へ]

団体の情報に変更があった場合は、
青年海外協力隊事務局(jvthd@jica.go.jp)にご連絡ください。

\ 新OV会をよろしく!

「ボリビアと日本の懸け橋」を目指し、ボリビアOV会が発足

ボリビアへの協力隊派遣開始から47年目となる2024年、JICAボリビアOV会が発足しました。設立のきっかけは、帰国後にボリビアOVや関係者間で定期的にコミュニケーションを図れる場がなく、隊員時代に交流のあった方々とも疎遠になりがちだと感じたことです。設立の目的は、①ボリビアの現役隊員とOVの交流を深め発展させる場を提供する、②協力隊経験の社会還元活動を支援する、



2024年12月に開催された「JICAボリビアOV会設立記念イベント」には、80人以上の参加者が集まった

③ボリビアと日本の友好を深める活動を推進する、の3つで、ボリビアOVだけでなく目的に賛同する方は、どなたでも入会していただけます。

24年12月には設立記念イベントが開催され、ボリビアOV、ボリビア臨時代理大使、在日ボリビア人など総勢80人以上が集まりました。ボリビア人と日本人の混合ダンスグループによるパフォーマンスや、ボリビアの伝統的な楽器による演奏や歌が披露され、盛況を博しました。日本で暮らすボリビア人と日本人が共に楽しむ様子は、まさしく当会の目標すボリビアと日本の友好を深める機会になりました。

25年12月には帰国報告会とキャリアセミナーの開催を予定しており、今後はさまざまな角度から、隊員経験を社会に還元する活動を計画していくと考えています。ボリビアと日本の懸け橋となるような団体を目指し、発展していくければと思っています。

ほうらくひろむ
寶樂大夢さん
ボリビア/青少年活動 /2018年度4次隊、
2021年度7次隊・鹿児島県出身
JICAボリビアOV会長
JICA経済開発部農業・農村開発第1グループ



世界に広がるOVの企業・団体

ピックアップ ベレケの村

合同会社ベレケの村

千葉県南房総市白浜町白浜935

設立: 2016年1月

事業内容: 農産物生産・加工・販売、イベント開催、キルギス雑貨輸入販売

営業時間: 9:00~17:00

定休日: 土・日曜日、祝日

<https://www.berekenomura.com/>



キルギスで活動中に出会った2人が、キルギス人が自然と共生しながら家族で農業を営んでいた姿に感銘を受け、それを日本で実践するために美しい海と花畑が広がる南房総の白浜町に移住。2016年にベレケの村を立ち上げた。

</

JICA INFORMATION

JICA海外協力隊発足60周年記念式典が開催

11月13日(木)に、「JICA海外協力隊発足60周年記念式典」が東京都千代田区の東京国際フォーラムで開催されました。各界からの来賓や、多くの協力隊OVを含む招待客など約2,300人が参加する中、式典冒頭では活動中に亡くなられた隊員たちへ黙とうが捧げられました。式典の第一部では、天皇皇后両陛下御臨席の下、来賓からの祝辞や派遣国からのビデオメッセージ、OVからの言葉などが紹介されました。第二部は60周年記念動画の放映に始まり、OVによるトークセッションやファッショショーンショーなどが行われ、協力隊の名を冠した小惑星の名前が伝えられました。最後は隊歌「若い力」の齊唱をもって盛会のうちに幕を閉じました。



60周年記念誌の
ウェブ版はこちら



第一部の冒頭では、
天皇陛下からお祝いの
お言葉を賜った

帰国隊員向けインフォメーション

帰国した方への情報

協力隊経験を生かしたキャリア形成のための制度や、役に立つ情報を提供しています。詳細はリンク先をご確認ください。

- 進路を探る 帰国後研修（オンラインでの実施）、テーマ分野別セミナー、
帰国隊員の進路状況
進路相談カウンセラー/JICA海外協力隊相談役の相談窓口
- 働く 教員・自治体の特別採用枠、PARTNERなどでの求人情報掲載
- 学ぶ 教育訓練手当、奨学金事業
- 派遣証明書の申請 就職先・教員採用試験・奨学金の申請などで派遣証明書が必要な方は、こちらから発給を申請ください
- OV関連のお知らせ 協力隊関連イベント、OV(OB・OG)会、OVの著書紹介や隊員活動に関する講演などについてのご案内



JICA国内拠点

全国15カ所にあるJICA国内拠点では、JICA海外協力隊経験者を対象とする就職・キャリアアップ・スキルアップのためのセミナーや、国際協力に関連する各種セミナーなどを開催しており、国際協力関連の資料などを閲覧できます。また、全国8カ所にあるJICAの「地球ひろば」では、世界のさまざまな課題や途上国と私たちのつながりを体感できます。

各国内拠点の
所在地・連絡先などは
以下をご覧ください



クロスロード [2025年OV(OB・OG)向け]

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル
制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
編集：飯渕一樹 阿部純一 成松佳子
デザイン：亀井敏夫
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

●本誌に掲載されている記事等の内容については執筆者の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。
落丁・乱丁の場合はお取り替えしますので、発行元までご連絡ください。



OV News

News
1

協力隊発足60周年を祝し 初年度派遣各国で記念イベント開催

青年海外協力隊の初派遣から60年の節目を迎える2025年度には、初年度派遣国（※）の在外事務所らによる記念イベントが続々と企画されています。

最初の派遣国であるラオスでは、10月16日（木）に首都ビエンチャンで60周年記念式典が実施され、ラオス政府から外務大臣や財務大臣、保健大臣などが出席。日本側からは小林勉駐ラオス日本国特命全権大使やJICAの田中明彦理事長、協力隊ラオスOV会、1965年度1次隊の稻作隊員として派遣された大西規夫さんが列席し、総勢200人以上のイベントとなった。式典では大西さんが60年前の活動の様子についての体験談を語ったほか、ラオスOV会長や現役隊員代表など、ラオスに関わってきた隊員たちからのスピーチが行われた。

カンボジアでは10月13日（月）に「歩みを止めず、想いをつなぐ」というテーマで式典が催され、来賓としてブラック・ソコン副首相兼外務国際協力大臣と植野篤志駐カンボジア日本国特命全権大使が出席したほか、JICAからは田中理事長と大塚卓哉青年海外協力隊事務局長が参加。派遣中の隊員やカンボジアの配属先関係者、OVなども含めて200人余りが参加し、隊員による活動紹介の発表も行われた。

フィリピンでは8月28日（木）、JICAと在フィリピン日本国大使館の共催での記念式典が日本国大使公邸で開催された。JICA議連から小渕優子会長ら議員一行が日本から赴いたほか、フィリピン政府関係者や議員、遠藤和也駐フィリピン日本国特命全権大使、派遣中のフィリピン隊員とカウンターパート

News
2

初期隊員の言葉を残したい！ クラウドファンディングで 記録動画を制作

最初の協力隊派遣から60年がたち、当時のOVたちの年齢は80歳を超え、初期隊員の中にはすでに鬼籍に入る人々も多い。そうした状況下、当時の派遣国の様子を伝える貴重な談話を残そうと、JICAと一般社団法人協力隊を育てる会により記録映像を制作するプロジェクトが2025年春から実施された。

予算はクラウドファンディングで広く募集したが、協力隊事業が発足した記念日でもある4月20日（日）に公開すると、当初目標の60万円を1週間で達成。5月末の募集終了までに約170万円余りの支援金が集まり、無事に映像制作にこぎ着けた。

映像では、協力隊派遣初期を知る人々として、矢澤佐太郎さん（フィリピン／野菜／1965（昭和40）年度1次隊）、花田眞人さん（エルサルバドル／体育／1968（昭和43）年度1次隊）、稻見広政さん（タンザニア／自動車整備／1972（昭和47）年度2次隊、SV／自動車整備／1978（昭和53）年度4次隊）という3人のOVならびに、青年海外協力隊事務局から最初の協力隊

今年も各地で活動している協力隊OVたち。
その取り組みの一部をご紹介します。



フィリピンで開催された記念式典の参加者一同

など多くの人々が出席した。比日議員連盟会長のアン・ミゲル・ズビリ上院議員からの祝辞では、JICAの協力が防災や農業、公共インフラなどに大きな変化をもたらしてきたことが述べられ、最も尊いのは協力隊員による人ととの交流であるとして、これまでの隊員の功績に対して謝意が示された。

マレーシアでは日本人会のニュースレターにJICA事務所の企画調査員（ボランティア事業）や現役隊員、OVによる60周年記念リレー寄稿を連載中で、ナショナルスタッフの手による英文の記念チラシの制作・配布も実施。事務所では、今後に向けて記念リーフレットの制作なども計画している。

ケニア事務所は年明け26年2月に記念式典を予定しており、年度内は各国で協力隊発足60周年を祝う事業が続きそうだ。

※協力隊は1965年12月のラオスへの派遣を皮切りに、翌66年1月にカンボジアとマレーシア、2月にフィリピン、3月にケニアへの派遣が始まった。

調整員としてエルサルバドルに派遣され、事務所立ち上げなどに奔走した望月久さんへのインタビューを実施した。

記録は約35分のドキュメンタリー動画として編集され、9月13日（土）に聖心女子大学4号館（旧青年海外協力隊広尾訓練所）で試写会が挙行された。11月13日（木）に都内で実施された「JICA海外協力隊発足60周年記念式典」の会場でも上映され、DVD化して各所での活用が見込まれている。



※支援金の募集はすでに終了しています。

News 3 JICA九州が協力隊60周年を記念して講演会と同窓会を実施

2025年9月13日(土)、JICA九州が協力隊発足60周年を記念し、帰国隊員社会還元表彰受賞記念講演会と60周年記念同窓会を開催した。九州各県の協力隊OVをはじめ、OV会、支援する会、専門家連絡会とその関係者など約70人に上る人々が参加した。

今年は、第3回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰で福岡県出身の庄田清人さんと大分県出身の山路健造さんがそれぞれ賞に選出された(P12-14「Award Winners」参照)。講演はこれを記念したもので、オンライン配信も実施。講演の様子についてJICA九州市民参加協力課の渡久地舞さんは「九州出身で地域の課題解決に尽力する2人の具体的な活動内容と『協力隊経験者の力が社会課題解決に必要』というメッセージ

に、参加者の皆さんには大きな刺激を受けて『一緒に頑張っていこう』という雰囲気が生まれていました」と話す。

講演会後には60周年記念同窓会が開催され、自身もタンザニアでの協力隊経験があるJICAの小林広幸理事も駆けつけた。「協力隊員として派遣された年代や地域・国はそれですが、皆さんすぐに打ち解けて大いに盛り上りました」(渡久地さん)。また、60周年を記念して作成した、帰国後に地域で活躍する九州出身OVの写真パネルも、域内各県での展示に先駆けてお披露目された。

講演に登壇した一人、山路さんは「長らく九州で活動していくので来場者も帰国後にお世話になった方ばかりで、妙に緊張感がありました。ただ、こうして帰ってこられるルーツの土地があるからこそ、さらに今の活動を頑張ろうという気持ちになりました。同窓会で久しぶりに会った方々からは講演や連携について打診を頂くなど、「協力隊」をキーワードにした新たな関係も築くことができ、とてもよい会でした」と振り返った。

News 4 二本松・駒ヶ根の両訓練所で記念イベント開催

今年、二本松と駒ヶ根それぞれの青年海外協力隊訓練所でイベントが執り行われた。

二本松訓練所では4月12日(土)に開所30周年記念イベントを開催。一般来所者も参加できる形式の催しで、メイン会場の講堂では協力隊や二本松訓練所に関するクイズ大会や、特別講座「学び直しの英語」など各種プログラムが行われた。並行して、サブ会場の広報展示室では、2015年に公開された映画『クロスロード』を上映。その他、元所長や現役スタッフによる来場者への施設紹介や、希望者には施設の裏側を見ることのできるバックステージツアーも行われるなど、大勢の来所者を楽しませた。また、訓練所食堂でのエスニックランチも楽しみに、県内外から足を運ぶ来場者が多く見受けられたという。

駒ヶ根訓練所では10月25日(土)から26日(日)にかけて「Home Coming Day - 帰ってきた隊員たち -」と銘打ち、協力隊発足60周年を祝うイベントを実施。駒ヶ根訓練所出身のOVを中心に一般の来所者や2025年度2次隊の訓練生など140人以上が参加し、初日には駒ヶ根協力隊を育てる会の池崎保会長のスピーチや、3人の駒ヶ根OVによるパネルディスカッション、協力隊60周年記念動画の上映といった催しが行われた。同日夕方にはイベント参加による交流会の場も設けられた。

駒ヶ根訓練所のイベントでは駒ヶ根訓練所出身のOV先着40人限定で、25日の夜に訓練所の居室を宿泊先として提供。宿泊者は訓練生と同様の門限や消灯時間の下で思い出の詰まった訓練所に一泊し、翌朝にはラジオ体操や朝の集いにも参加するなど、訓練当時ながらの時間を過ごした。

News 5 OVで看護師の香川沙由理さん(第2回社会還元表彰受賞者)がミャンマー地震で国際緊急救援隊として活動

2025年3月28日(金)にミャンマー中部で発生した地震被害に対して派遣された国際緊急救援隊(JDR)医療チーム一次隊の一員として、24年の第2回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰の受賞者の一人である香川沙由理さんが活動した。

香川さんは、現地到着後の診療テント設営から携わり、のべ約1,200人の患者を診療した。「被災地は大きな建物が倒壊し、余震もあるため、路上でテント生活を送っている人々も。外傷(骨折、挫創など)や不安や不眠、食欲不振などを訴える人が多くきました」。ミャンマー語の通訳者から現地の文化や習慣を教わり、プライバシーに配慮して診療するように心がけた。「緊張していた患者さんや家族に現地の言葉で挨拶や感謝の気持ちを伝えると、表情が穏やかになりました。協力隊経験を通して学んだ、現地の言葉でコミュニケーションを行うことの重要性を再確認しました」。

普段は日本国内の病院で外国人患者やその家族への医療支援、医療従事者への異文化理解研修の実施などに取り組んでいる香川さん。JDRには協力隊からの帰国後に登録し、今回初の参加となった。

「国内外の国際看護活動で得た経験と知識は私の強みの一つです。今後も研さんを積み、看護師として患者さんにより良い看護を提供できるよう努力していきたいと思います」

香川沙由理さん

マラウイ/看護師/2012(平成24)年度3次隊・千葉県出身



News 1 協力隊発足60周年記念イベント



JICA九州で開催された記念同窓会の参加者たち
現役隊員たちと懇談するラオス初代派遣の大西親夫さん(写真左端)

News 4 二本松・駒ヶ根両訓練所で記念イベント開催



二本松訓練所のイベントで行われたバックステージツアーの様子



青年海外協力隊長野県OB会の小林恭介会長の音頭による万歳三唱で締めくくられた駒ヶ根訓練所のホームカミングデー

News 3 協力隊60周年を記念してJICA九州が講演会と同窓会



講演会に登壇した庄田清人さん(上)と山路健造さん(下)

News 5 ミャンマー地震で国際緊急救援隊として活動



上:JDR医療チーム一次隊として活動した人々
左:活動で、現地の児童への処置を行う香川さん



「JICA海外協力隊応援基金」 活用&寄附の事例

2024年に設立された「JICA海外協力隊応援基金」。

現役隊員への活用事例や、心温まる寄附のエピソードをご紹介します。

Text=秋山真由美(応援基金事例) 写真提供=ご協力いただいた各位

バヌアツの防災力向上を目指して 応援基金の活用で訓練用水消火器を入手



干場圭さん

バヌアツ/防災・災害対策/
2023年度3次隊・千葉県出身

自然災害の多いバヌアツで活動する干場圭さんは、JICA海外協力隊応援基金を活用した第1号だ。

2024年2月に首都ポートビラにあるバヌアツ教育訓練省に赴任。10ヶ月後に発生した大地震の災害時支援や、学校防災教育の推進などに取り組む中で、消火器の使い方を知らない人が多いことを知った。水を充填・噴射して何度も使える訓練用水消火器があれば、正しい使い方を学ぶ機会を提供できるが、現地では手に入らないため、日本から調達する方法を模索し、応援基金の申請に至ったという。

購入費と輸送費を応援基金で支援してもらい、訓練用水消火器2本と放水を当てるのが届けられると、さっそく同僚に使い方をレクチャーし、防災教育の中に小中学生や先生を対象とした消火訓練を組み込んだ。最初は恐る恐るだった子どもたちもすぐに慣れて、楽しそうに訓練に取り組んだという。残りの任期は首都だけでなく、離島やへき地にある50以上の学校に赴き、消火訓練を各地域に広める計画だ。「消火器の正しい使い方を知ることは、バヌアツ全体の防災力向上にもつながります。応援基金のおかげで、消火訓練が私の帰国後も継続してできる道筋がつき、感謝しています」



上: 消火訓練で干場さんが子どもたちに消火器の使い方を教える様子。的に水がうまく当たると歓声が上がった

下: 訓練用水消火器の到着を喜ぶ、職場の同僚たちと干場さん

中学生が探求学習で集めたお金を、 世界中で活躍する隊員のために寄附

協力隊員の活動を応援したい、とJICA駒ヶ根に直接寄附を届けたのは、駒ヶ根市立赤穂中学校自閉症・情緒障害特別支援学級3年生の9人と担任(当時)の加藤博美さんだ。「自立」をテーマにした探究学習の一環として、自分たちの手でトウガラシを栽培し、唐辛子みそに加工して校内で販売した。その売り上げの使い道を考え、生徒たちが自ら出した答えが「JICAの応援基金に寄附すること」だったという。「苦労して稼いだお金が、世界に派遣され活躍している方々の役に立てば嬉しいです」(加藤さん)。



トウガラシ栽培は生徒たちが畑を作ると
こから始めた



「ぜひ自分たちで手渡したい!」とみんなで
JICA駒ヶ根に赴いた

JICA海外協力隊応援基金とは?

~これからも、この歩みを続けるために~

途上国で活動している現役隊員、帰国後に国内外で社会問題の解決に取り組む隊員OB・OG、その他JICAボランティア事業に関わる取り組みをご寄附で応援いただくものです。郵便局や銀行、クレジットカードなどによるご支援が可能です。

[応援基金について](#)

[応援基金リーフレット](#)



JICAと百十四銀行が「遺贈希望者に対する遺言 信託業務の紹介に関する協定」を締結しました

JICA海外協力隊は発足から60年。開発途上国の人々と共に笑い、汗と涙を分かち合い、世界と日本の「かけはし」となる人材を育ててきました。平和で豊かな世界の実現を目指すこの国民参加型の事業を支える「JICA海外協力隊応援基金」には、遺産の一部を寄附する「遺贈」という支援の形があります。

2025年7月、JICA四国センターは百十四銀行と、遺言信託業務紹介に関する協定を締結しました。これはJICAとして初の地方銀行との連携です。遺贈寄附を検討される方は、百十四銀行を通じて専門的なサポートを受けながら、安心して寄附を行うことができます。皆さまの寄附が、協力隊の歩みを未来へとつなぐ力となります。

[詳細はこちら](#)

